慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済価値説の体系
Sub Title	
Author	武部, 与八郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.8 (1925. 8) ,p.1212(122)- 1241(151)
JaLC DOI	10.14991/001.19250801-0122
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250801-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟價値說の體系

武部與八郎

一

（定義）、交換價値とは任意の二商品の交換比例の事である。今任意の二商品をx、yとすれば二商品の交換價値は$\frac{x}{y}$、$\frac{x}{y}$の數値を V. E.（Value in Exchange）と置けば

$$\frac{x}{y}=V.E. \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots (1)$$

（定義）、或る量の數値とは此量と同種類の一定量との比を言ふ。從てE.V.が算出し得られる爲にはx、yは同質且つyは與へられた一定量でなければならぬ。

二

x、yを同質ならしめんが爲に行はれた努力の一。x、yを或る物質的な富に同質化せんとする努力。

xを或る特定の財貨例へば家畜或は織物或は銀或は金の一定量に取つてM′、yを同じく取つてMとする。又分子と分母とを同じもので除するも其の値は變らぬ故

$$\frac{x}{y}=\frac{M'}{M}=\frac{\text{或る特定の財貨 } x}{\text{或る特定の財貨 } y}$$

xyの數値が算出し得られる爲にはx、yが同質なるのみならずyが與へられた一定量でなければならぬ、今Mを與へられた一定量Yに取ればM′はP.$\frac{Y}{M}$に於て表明し得られる、Pは任意の數である、然らば

$$\frac{x}{y}=\frac{M'}{M}=\frac{P.\frac{Y}{M}}{\frac{Y}{M}} \quad \therefore \quad \frac{x}{y}=\frac{M'}{M}=\frac{P.\frac{Y}{M}}{\frac{Y}{M}}=P \quad \cdots\cdots (2)$$

(2)の式は一般に價格を意味する。

（定義）、價格とは二商品の交換比の數値である、或は價格とは交換價値の數値である。

證明、(1)より$\frac{x}{y}$=V. E. V.E.は任意の商品の交換價値の數値である。(2)より$\frac{x}{y}$=P　Pは價格である　(1)及び(2)より V. E.=P　即ち價格とは任意の二商品の交換價値の數値である。

(2)より　$\frac{M'}{M}=P$ ……（3）

$$\frac{P.\frac{Y}{M}}{\frac{Y}{M}}=P \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots (4)$$

Mは貨幣である、此場合Mは家畜でも織物でも卑金屬貴金屬信用の何れでもあり得る。Yは圓或は磅或は弗に制限せられた貨幣である。(3)は(4)に對してヨリ一般的である換言すればヨリ具體的である。

る、(3)が國際的價格であるに對して(4)は國家的或は個別的價格である。

（定義）

$\frac{P.\frac{x}{y}}{\frac{x}{y}}=P$ を國家的或は個別的價格と言ふ

$\frac{P.\frac{x}{y}}{\frac{x}{y}}=\frac{M'}{M}=P$ を國際的價格と言ふ

$\frac{P.\frac{x}{y}}{\frac{x}{y}}=\frac{M'}{M}=\frac{x}{y}=P$ を價格一般と言ふ。

(1)及び(2)より

$$\frac{P.\frac{x}{y}}{\frac{x}{y}}=\frac{M'}{M}=\frac{x}{y}=P=V.E.\cdots\cdots\cdots\cdots(5)$$

從て交換價値なる概念と價格一般なる概念とは同じ大サの外延を有する、從て交換價値なる概念は國際的價格及び國家的個別的價格に對してヨリ一般的なる概念である。

$\frac{x}{y}$ の數値を算出する爲x、yは或る特定の財貨例へば家畜織物銅鐵銀金の如き、時と場所とに應じて最も普遍性を有する財貨に約元せられなければならぬ。

（定義）、交換價値が算出せられる爲、任意の二商品が約元せらる可き財貨を貨幣と言ふ。

任意の二商品の數値が算出せられる爲にはx、yは同質なるのみならずyは與へられた一定量でなければならぬ。

（定義）、貨幣の與へられた一定量を貨幣單位と言ふ、貨幣單位が法定せられたる場合是を法貨と言ふ。

定義せられた意味に於ける貨幣は經濟的世界の歷史的發達と共に變遷した、而して此の意味に於ける貨幣に絕對理想的なるものの存せざる事は既に多くの人々に依て證明せられた、物としての貨幣は決して經濟價値の理想的、絕對的なる標準であり得ない事が明かにせられた、然し乍ら我々は、x、yを何等かの貨幣に同質化し又貨幣單位を設定する事に依て交換價値 $\frac{x}{y}$ の數値を近似的に正確に算出し得る事を以て兎に角滿足してゐる。

三

x、yを同質ならしめんが爲に行はれた努力の二。x、yを人間的なる富に同質化せんとする努力。

任意の二商品x、yの交形の形式は $x=y$ である。

（イ）xに費された勞働を L_1、yに費された勞働を l_1 とすれば $x=y$ より $L_1=l_1$。xに費された勞働を $L_2L_3L_4\cdots\cdots$、yに費された勞働を $l_2l_3l_4\cdots\cdots$、とすれば $L_2=l_2$, $L_3=l_3\cdots\cdots$ 從て

$$\frac{x}{y}=\frac{L_1}{l_1}=\frac{L_2}{l_2}=\frac{L_3}{l_3}\cdots\cdots\cdots\cdots(6)$$

一定時一定點に於て一時間の「社會的に必要なる勞働」は一定であり得ると假定し $l_1l_2l_3\cdots\cdots$ を夫々一定時一定點に於ける一時間の社會的に必要なる勞働を表はすものとすれば、我々は(6)より $\frac{x}{y}$ の數値を算出し得るであらう、理論上算出し得る、然し乍ら事實上勞働の生產力は不斷に進展して止まぬ。從て一時間の「社會的に必要なる勞働」は全く不定であり勞働價値計量の單位とはな

らぬ。更に一定時一定點に於ける一分時或は一秒時の社會的必要なる勞働は今の處計量せられ得ぬ。一般に、費された勞働量を實際的に且つ正確に計量する方法を我々は知らぬ。以上通覽して我々は次の如く言ふ

任意の二商品x、yは理論上費された勞働に同質化され得る、$\frac{x}{y}$の數値は理論上勞働に依て算出し得る。然し乍ら交換價値を勞働に依て定めんとする場合我々は我々の實際生活を滿足せしむるに足る交換價値の數値を算出し得ない。今の處不可能である。

（ロ）xに對して認められた效用をU_1、yに對して認められた效用をu_1とすれば$x=y$より$U_1=u_1$, $U_2=u_2$, $U_3=u_3$ ……、從て

$$\frac{x}{y}=\frac{U_1}{u_1}=\frac{U_2}{u_2}=\frac{U_3}{u_3}= \cdots\cdots\cdots\cdots (7)$$

效用は心理的事實である、其は瞬間と共に變化する效用は勞働に對して更に不定である、故に我々は次の如く言ふ

任意の二商品x、yは理論上認められた效用に同質化され得る、$\frac{x}{y}$の數値は理論上效用に依て算出し得る。然し乍ら交換價値を效用に依て定めんとする場合我々は我々の實際生活を滿足せしむるに足る交換價値の數値を算出し得ない。今の處不可能である。

二ヶの商品の交換に於て十五圓の價格が成立したとする、例へば帽子一ヶ十五圓米三斗十五圓の價格が成立したとすれば、同じもの（十五圓）に等しきもの（帽子一ヶと米三斗）は相等し、故に帽子一個＝（十五圓）＝米三斗　此場合帽子一ヶと米三斗とは十五圓に於て共通である。此意味に於て十五圓は交換の媒介物である交換の媒介物は一般に貨幣Mを以て表明せられる今二ヶの商品をABにて表はせば交換の媒介物を通じての二商品の交換の一般的形式は　A＝M＝B　である。A或はBが富として存在し得るは其が價格を有するからである。逆に價格を有するものは凡て富である。A＝M＝B　は明かに經濟學の一般的なる認識の對象である、實證的に是は疑ひ得ない事實である。

實證的なる富の本質の研究に滿足し得ない人々は言ふ。富は人間勞働が費されて居るが故に富である富の存在は人の勞働に依て始めて可能となる。富は人に依て效用が認められるが故に富である人の欲望こそ富の存在を可能ならしむるものである。と。我々は生きて居る事を現在としての現在に於て直接且つ確實に經驗し得る更に生命が不斷の創造的進化である事を直接且つ確實に經驗し得る。此不斷に創造的に進化する生命の直接且つ確實なる經驗を知的に把握すれば「我々は生きねばならぬ」「不斷に何者かを創造しなければならぬ」となる。直接なる經驗を知的に把握すると言ふ事は認識すると言ふ事であり、認識すると言ふ事は生きて居ると言ふ事を前提とする。生きて居ると言ふ事を前提とせざる認識は無意義である、生きて居ると言ふ事を前提として、認識する爲には認識する主觀と認識の對象とが與へられる。アダムとイヴとが與へられる。更に認識すると言ふ事は主觀による客觀の認識である。主觀による客觀の認識は、創造する、或は愛すると言ふ言葉で置き換へられても可い。生きてゐる。生きねばならぬ、不斷に何者かを創造して生きねばならぬ。

科學は認識を前提とする、認識は生きねばならぬ事、不斷に何者かを創造しながら生きねばならぬ事を前提とする、從て科學は生きねばならぬ事不斷に何者かを創造しながら生きねばならぬ事を

前提とする。經濟科學の爲には經濟的に生きねばならぬ事經濟的に常に何者かを創造しなければならぬ事が前提せられる。此經濟學に於ける「ねばならぬ」を經濟的當爲或は經濟的文化價値と言ふ。而して此の經濟的當爲を可能ならしむる經濟的に生きて居ると言ふ事の直接なる經驗を經濟的生命の直觀或は體驗と言ふ。現在としての現在に於て體驗せられるものを經濟的生命の衝動力と言ふ。

我々は經濟的文化價値に從て(一)經濟的に生きねばならぬ(二)經濟的に常に何者かを創造しなければならぬ。經濟的に生きねばならぬ爲に富が存在し、經濟的に常に何者かを創造しなければならぬ爲に經濟價値が存在する。經濟價値は經濟的に常に何者かを創造するが故に價値である。經濟學に於ける創造は富の創造である、從て常に何等かの富を創造するものこそ經濟價値を有するものである。勞働と效用とは常に新たなる富の存在を可能ならしむると考へられる限りに於て經濟價値である。

認識の世界に於ける創造は凡て「主觀に依る客觀の認識」による。愛による。主觀と客觀とは認識界に於ける創造の二ッの根本的要素である、認識界の創造の爲に豫定せられた一者と他者、アダムとイヴである。認識界の創造は凡て「主觀に依る客觀の認識」に相似なる型に於て行はれる。經濟的富の創造は認識の此の根本的特性に從て主觀的要素なる效用と客觀的要素なる勞働とに依て行はれる。富の創造は人間的物的經濟的政治的社會的倫理的美的歷史的關係である。然し此等の諸關係は凡て富の創造の主觀的要素效用と客觀的要素勞働とに夫々漏るる事なく內含せられてゐる。其はアダムとイヴの子孫は人間的物的經濟的政治的社會的倫理的美的歷史的なる複雜な關係を構成するが結局に於て此等凡ての關係は唯二ッの根本的要素アダムとイヴとに約元せられ得るのと同じである。今經濟的認識の主觀を貨幣、對象一般を價格と呼ぶならば價値とは貨幣及び價格の子孫の事である或は價値とは價格の子孫の事である。勞働價値は男系子孫效用價値は女系子孫である。

四

x、yを同質ならしめんが爲に行はれた努力の三。x、yを觀念的なるものに同質化せんとする努力。經濟的認識の對象一般に同質化せんとする努力。任意の二商品の交換價値x／yの數値を算出する爲には、x、yは同質でなければならぬ。x、yを同質ならしむる努力は經濟學的に二ッの方向に向つた。一ッは物としての富に同質化する方向に向つた。前者が實證的であるに對して後者は價値的、前者が貨幣論を起したに對して後者は價値論を發生せしめた。經濟哲學的には、x、yに同質なるものは、物としての貨幣、人間的價値に對して更にヨリ具體的なる、價格一般に求められる。經濟學の認識の對象一般に求められる。

價格は現實に成立する、一定時一定點に於ては一物に就て一價である。任意の價格例へば五圓を取れ。一定時一定點に於ける五圓の價格は(一)綿絲の絹絲の鐵の銅の、種々なる生活必要品便利品奢侈品の五圓の價格であり得る(二)勞働價値に依る交換價値の形式 U_{-u} の數値であり得る。

今一定時一定點に於て成立する任意の價格をP、P 價格の勞働に依る交換價値の一般的形式を L_{-l}、效用に依る交換價値の一般的形式を U_{-u}。Pの綿絲の勞働交換價値の形式を L_{-l_1}、Pの絹

絲の勞働交換價値の形式を$L_1|l_1$、以下同じ。Pの綿絲の效用交換價値の形式を$U_1|u_1$、Pの絹絲の效用交換價値の形式を$U_2|u_2$、以下同じ。とすれば

$$\frac{L}{l}=\frac{L_1}{l_1}=\frac{L_2}{l_2}=\frac{L_3}{l_3}\quad\cdots\cdots\text{以下同じ}\quad\cdots\cdots(8)$$

$$\frac{U}{u}=\frac{U_1}{u_1}=\frac{U_2}{u_2}=\frac{U_3}{u_3}\quad\cdots\cdots\text{以下同じ}\quad\cdots\cdots=P\quad\cdots\cdots(9)$$

一定時一定點に於ける任意の價格Pは、無限に多數なる、勞働に依る、或は效用に依る交換價値の形式を有する有し得る。

(8)より　$\dfrac{L}{l}=\dfrac{L_1+L_2+L_3+\text{以下同じ}}{l_1+l_2+l_3+\text{以下同じ}}=P\quad\cdots\cdots(10)$

(9)より　$\dfrac{U}{u}=\dfrac{L_1+L_2+L_3+\text{以下同じ}}{u_1+u_2+u_3+\text{以下同じ}}=P\quad\cdots\cdots(11)$

我々はPを決定するl_1、l_2、l_3、……。L_1、L_2、L_3、……。及びu_1、u_2、u_3、……。U_1、U_2、U_3、……。を數へ擧げ盡す事は出來ぬ。然乍ら、一定時一定點に於て成立する任意の價格Pの諸交換價値の二ッの組即ち（$L_1|l_1$、$L_2|l_2$……）、（$U_1|u_1$、$U_2|u_2$……）が、$L|l$と$U|u$とに約元せられ得る事を推定する（10及び11參照）。「以下同じ」を了解するものと推定する。

交換價値一般（$L|l$及び$U|u$）に屬する特性にして且つ個々の商品の交換價値（$L_1|l_1$、$L_2|l_2$……。$U_1|u_1$、$U_2|u_2$……）にも屬する特性は凡て、全ての價格（P）に屬する事を推定する、最後の推定は交換價値歸納の原理として役立つであらう。

一定時一定點に於て成立する任意の價格Pが內含する諸々の交換價値は交換價値歸納の原理に依て$L|l$と$U|u$とに歸納せられた

(10)より　$\dfrac{L}{l}=P\quad\cdots\cdots(12)$

(11)より　$\dfrac{U}{u}=P\quad\cdots\cdots(13)$

(12)及(13)よりP$=\dfrac{L}{l}=\dfrac{L}{u}\quad\cdots\cdots(14)$

Pは$L|l$及び$U|u$に共通する、Pは兩者に對してヨリ具體的なる存在である。感覺と單純感情とから個々の心理現象が創造的に綜合せられる樣に$L|l$と$U|u$とから個々の價格が創造的に綜合せられる。此創造的綜合の原理は經濟の本則と稱せらるる所のものである。生產者の立場からの交換價値と消費者の立場からの交換價値とは、其雙方に「最小の勞費を以て最大の效果を得んとする」經濟の本則が作用する場合、價格に創造的に綜合せられる。$L|l$及び$U|u$の數値は算出し得なくとも、經濟の存する所常に價格は成立する　現實なる二商品の交換がある。

個々の價格の系列は

$$(\cdots\cdots\ 1,\ 2,\ 3,\ \cdots\cdots n,\ n+1,\ \cdots\cdots\cdots\cdots)\text{圓}$$

我々は個々の價格の組を價格一般と呼び得るであらう。

個々の商品は凡て勞働或は效用に約元せられる。個々の商品の勞働に依る或は效用に依る交換價値は交換價値歸納の原理に依て勞働に依る或は效用に依る交換價値一般に約元せられる。勞働に依

る交換價値一般と效用に依る交換價値一般とは經濟の本則或は創造的綜合の原理に依て任意の一價格に約元せられる。任意の一價格は凡て價格一般に約元せられる。凡ての價格を有するものは富である、價格を有せざるものは經濟學上富でない。然らば價格一般は經濟學の認識の對象一般に外ならぬ。凡ての經濟現象が經濟學の認識の對象一般に於て完全に同質である事は疑ひ得ない事であらう。貨幣は家畜織物銅鐵銀金等々であり得る然るに此場合其は純粹に同質でない。凡ての貨幣價値を有するものに共通であり且つ效用であり得る然るに此場其は純粹に同質でない。凡ての貨幣價値を有するものに共通であり且つは又一者勞働と他者效用との統一者である價格一般は經濟學の認識の對象一般として任意の二商品の純粹なる同質的媒介者である。任意の二商品x、yの同質化は經濟學の對象一般換言すれば價格一般に於て窮極する。

五

x、yを同質ならしめんが爲に行はれた努力の四。x、yを超越論理的なる經濟的生命の衝動力に於て同質ならしめんとする努力。此部分の努力は經濟的認識の問題を取扱ふ。

實際的經濟學者の爲には○圓○錢の價値を有するものは價格を有せざるものとして其研究の對象から除外せられる、彼等の爲には價格の系列は例へば1から始まる

（…… 1、2、3、…… n、$\frac{1}{n+1}$ ……）圓

彼等の立場からでは此は正當であらう。然し經濟哲學者の立場からでは價格は○圓○錢から始まる

（0、1、2、3、…… n、$\frac{1}{n+1}$ ……）圓

然らば○圓○錢とは何ぞ。

交換價値を中心として見る時、富（G）は勞働（L）の函數であるG=φL。富（G）は效用（U）の函數であるG=φU。勞働と效用とは價格に約元し得られる而して富（W）は價格（P）の函數である　W=F(P)富。（G）は貨幣（M）の函數であるG=f(M)。然るに貨幣は凡て價格を有するものである、從てG=f(M)　は又　W=F(P)　に約元し得られる。經濟學の認識の對象一般は價格一般である、從て

W=F(P)……（15）

は經濟學に於ける命題的函數である。Lが勞働である事が豫定せられて居る從て「勞働がφLに於てはLが勞働である」は一命題である。φUに於てはUが效用である事が豫定せられて居る從て「效用を有するものは富である」は一命題である。f(M)に於てMが貨幣である事は豫定せられて居る從て「貨幣價値を有するものは富である」は一命題である。F(P)に於てPは價格一般である、PにL、U、Mの何れを代入してもW=F(P)はG=φL　G=φU.　G=f(M)　の諸命題に對して命題的函數である。命題的函數とは其の諸値が諸命題なる一函數である。經濟學に於ける命題的函數　W=F(P)　は經濟學上に於ける凡ての諸命題を滿足せしめる。

命題的函數(15)に於て、aが正當の種類の對象であるならば、F(P)はaが如何樣に選ばれ樣とも眞である、例へばaが○圓○錢の價格を有する富（空氣や水や人の才能の如き或は火星に於ける食物、衣服、住家の如き）である場合にも空氣や水や人の才能や火星人の食物。衣服。住家が何等かの意味に於て「富である」と世間の人々に認められて居る限り此等のものは凡て經濟學の認識の對象たり得る。

價格の系列は（……1、2、3、……）圓であると考へられて居る。價格の全系列は經濟學の認識對象一般を表明する。此價格の全系列の始めに於て豫定せられなければならぬものは〇圓〇錢である。對象一般に對して豫定せられるものは主觀一般である、然らば〇圓〇錢は經濟學の認識主觀一般に外ならぬ。

〇圓〇錢を敢て貨幣と呼ぶならば貨幣は經濟的認識の主觀である。經濟的認識主觀は經濟的生命が體驗せられる所常に存在すると豫定せられなければならぬ當爲である。然らば經濟學に於ける價値判斷の絕對的標準は〇圓〇錢の貨幣でなければならぬ。同樣にして勞働價値、效用價値の絕對的標準は〇勞働と〇效用とであり其は夫々生產者的認識の主觀、消費者的認識の主觀に外ならぬ。經濟學者が對象のみを問題とする限り價値判斷の絕對的標準は求め得ぬ。

〇圓〇錢が經濟的認識主觀であるとするならば〇圓〇錢の價格を有するものとは何ぞ。其は凡ての價格を有するものの爲に豫定せられなければならぬもの從て凡ての交換價値を有するものの爲に豫定せられなければならぬもの即ち經濟學者の所謂使用價値に外ならぬ。〇圓〇錢の價格を有するもの或は〇圓〇錢の交換價値を有するものとは使用價値の事である。

我々は〇圓〇錢の交換價値を認める從て凡ての使用價値は交換價値を有する從て使用價値は經濟學の正當なる研究對象であり得る。交換價値概念を擴張すれば使用價値も交換價値を有する但し〇圓〇錢の交換價値を有する。

使用價値を內含した交換價値は最早在來の意味に於ける經濟學の認識の對象一般でない、其は寧ろ價格一般或は命題的函數 $W=F(P)$ に於て表現せらるゝ可きものである。經濟學の認識の對象は正確に擴張せられた。

認識とは主觀に依る客觀の認識である、對象一般が豫定せられる、主觀の對立が豫定せられる、對象の存在も主觀の豫定も生命の存在が豫定せられてこそ始めて有意義となる。然るに認識するものの立場からでは生命の存在其者は認識以上のもの認識の爲に豫定せらる可きもの超越論理的なるものである。「我考ふ」が否定せられない以上生命の存在は疑ひ得ない。我々は生命の存在を現在として現在に於て直接且つ確實に經驗し得る。生命の衝動力は認識するものでもなければせられるものでもない純一無双なる生命其儘の實在である。

我々は x、y の同質を可能ならしむるものを（一）物的なる富に（二）人間的なる價値に（三）觀念的なる經濟學者の爲には與へられた對象の一般的存在以上に純粹同質的なるものは求め得られない又求める必要のないものとせられて居る。經濟哲學者の爲には對象一般は主觀一般に對立する當のものである、對立者が存する以上對象一般は最早哲學的意味に於ける純粹なる同質的媒介者でない、彼の爲には對象一般と主觀一般とを可能ならしむる經濟的生命の衝動力こそ x、y を同質ならしむる純一無双なる同質的媒介者である。彼は言ふ。x、y の同質を可能ならしむる純一無双なる同質的媒介者は經濟的生命の衝動力である。

經濟的生命の衝動力は經濟學の主觀一般と對象一般とを可能ならしむるものである。然らば其は經濟學的命題的函數 $W=F(P)$ と同格であるか。何者ば對象一般と主觀一般とを可能ならしむるもの

は二ツあり得ないからである。

x、yの同質を可能ならしむる一者を貨幣、他者を價値、統一者を價格一般とすれば經濟的生命の衝動力は第四者である。我々は此の第四者に於てx、yの同質を可能ならしむる純一無双なる且又超越論理的なる同質的媒介者を得た。經濟的生命の衝動力は、超越論理的なる、經濟的價値判斷の標準てある。其處に於ては 10＝11 であり得る、n＝n＋1 てあり得る。

經濟價値說の體系

序說　交換價値

第一篇　貨幣

第二篇　價値

第三篇　價格

以上は經濟價値說に於ける三個の原始的觀念である。

第四篇　經濟學的認識

第四篇は經濟價値說に於ける諸法則を含む

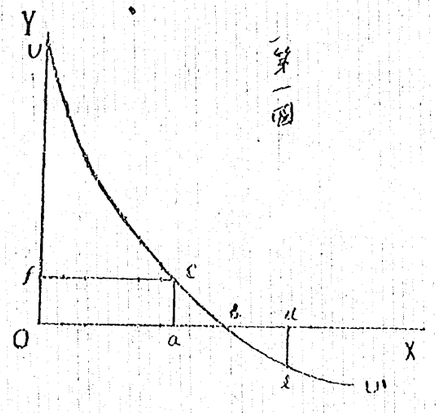
六

チャップマン氏著經濟學概說、三十三、四、五頁、限界效用のダイアグラムに依る說明。

右說明中に於ける Fig. 2. は第一圖の如くてある。チャップマン氏は此の作圖を次の加く說明する。

「我々は Fig. 2. に於ける UU′を『效用曲線』と呼ぶ。此曲線に關する商品のOa量が消費せられる時、

第一圖



該商品Oaより得られる全部效用はOacU又限界效用は其の高サacなる矩形である。若し供給增加の計量が極めて僅少なる量に於て爲される場合此矩形は極めて幅の狹いものであり得よう。約言すれば我々は單に次の如く言ひ得る、限界效用はacである、と。Obが消費せられる場合、全部放用はObU又限界效用は零である。Oaが消費せられる場合、全部效用はObU－bcd 又限界效用はdcである。Oに於て直角に交はる直線は座標軸と呼ばれる。曲線とOXとの間に於ける樣々な垂直的距離は其の縱座標、且つ又曲線とOYとの間の水平的距離は其の橫座標と呼ばれる。UU′曲線がOY上の一點より出發する事は、常に必ずしも可能でない、理論的にさへもそうである、何者は商品の最初の增加量の效用は無限であり得るからである」。

(I)此の場合チャップマン氏がOXを以て財貨の量を計らんとするは明かである、然るにOYは何を計量すべきものであるか。Oacfの矩形が極めて幅の狹きものであり得、結局に於て限界效用はacである事を約言せる處から見ればOYは效用を計量すべきものの如く見ゆる。チ氏に從へば矩形Oacfは限界效用である、今cf、aOの間を無限に狹めて行き、fがcに、Oがaに重なつた場合、矩形Oacfは一直線acとなる。幾何學の考へ方に從へば矩形は縱の線と橫の線とを必然に要求する、從て一直線acは矩形でない。故に限界效用が任意の矩形Oacfに於て表明せらる可きものとすれば、

caは限界效用を表明するものでない。然らばcaは何を意味するや、一般にUU′曲線上の任意の點の座標は何を計量すべきものであるか。UU′曲線上の諸點の諸横座標（此の場合財貨の量を計る）に對する諸縱座標は財貨の量に對する欲望を計量するものでなければならぬ。蓋し效用は欲望と欲望の對象たる財の存在とを條件として發生するものであるからである。效用曲線上の任意の一點を說明するに效用の縱座標を用ふるは科學上無意義である。效用曲線のみが問題であり且つ又效用曲線上の任意の一點例へばc點の座標を求めんとする場合

c點の座標（Oaの財貨、Ofの欲望）

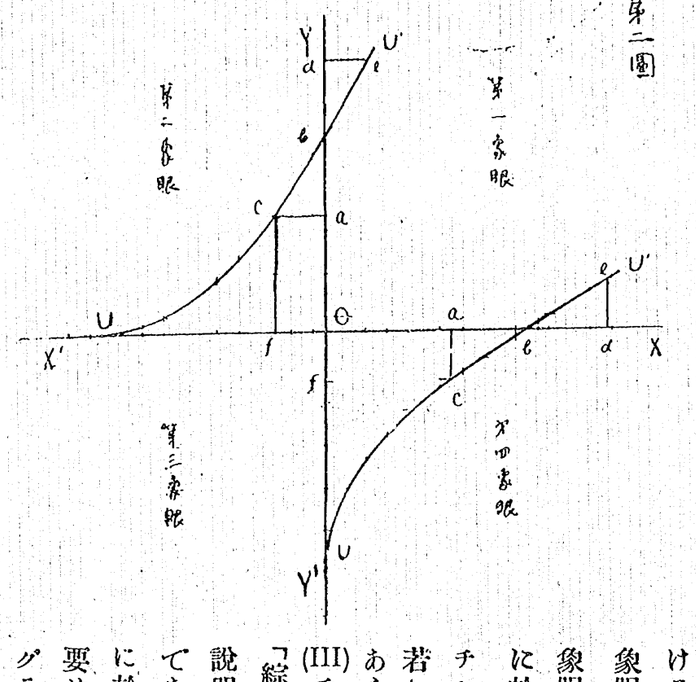
UU′曲線を $y=\phi x$ で表はす。此場合xを消費せられる財の量とすれば、yは其に對する欲望。xを欲望とすれば、yは其に對する消費せられる財の量である。效用一般に就て言ふ場合、欲望が變化すれば消費せられる財の量は變化する、反對の場合も眞である。效用一般に就ての說明の場合、消費せられる財の量が變化すれば效用は變化すると言ふは無意義である。何者ば效用一般の變化は效用曲線に於て既に豫定せられて居るからである。矩形Oacfは $\int_0^a \phi x\,dx$ である。積は何を意味するや。ヨリ具體的ならざる立場にある二ツの認識形式がヨリ具體的なる立場に創造的に綜合せられる事を意味する。今の場合

（消費せられる財）×（欲望）＝效用

を意味する。

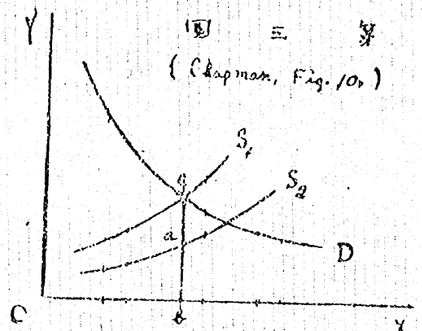
(II)以上述ぶる所に由り、OXは消費せられる財貨、OYは欲望を計量するものとすれば、OXは正の線、OYは負の線でなければならぬ。何者ばOXは正に消費せらる可く既に蓄積せられた財貨、積極的なる存在を表はすに對し、OYは自身何等積極的なる貯へを有せず、然も尙消費せんとする欲望、消極的なる存在を表はすものであるからである。從て今解析幾何學の約束に從ひ、互に直角に交はる二ツの直線XX′、YY′を水平と垂直に引き、交點を原點、依て以て生ずる四ツの直角の世界の第一象眼に於ける二ツの座標軸OX、OYを共に正の直線、第二象眼に於けるOY、OX′を夫々正、負の直線、第三象眼に於けるOX′、OY′を共に負の直線、第四象眼に於けるOY′、OXを夫々負、正の直線とすれば、チャップマン氏の前記の效用曲線UU′は第二象眼若しくは第四象眼に於て表現せらる可きものであらう。

第二圖



(III)チャップマン氏の前揭書、百七十四頁を開けば「綜合需要及び綜合供給のダイアグラムに依る說明」なる見出しの下に次の如き一節を見出すであらう「上に論ぜられた二個の場合は（其處に於ては諸事物が一定の比例に於て綜合的に需要せられ或は供給せられるのであるが）ダイアグラムに依て說明せられる。Fig. 10 を考へよ。

第三圖
（Chapman, Fig. 10.）



貨幣はOYに從ふて計量せられ、ナイフの中身 knifeblade 或はナイフの柄 knifehandle 或は雙方を表はす諸單位はOXに從ふて計られる。Dは特定種類のナイフの諸中身と諸柄とに對する需要曲線である。S_2は中身に對する供給曲線である。S_1はナイフの中身プラスナイフの柄より成る諸單位に對する供給曲線である、即ち、S_1とS_2との間の距たりは柄に對する供給價格である。然らば賣られるのはOb量の柄及びOb量の中身であり。中身の價格はab又柄の價格はaであらう」。此の場合OXがナイフの量、OYが其に對する價格を計る事は明瞭である。

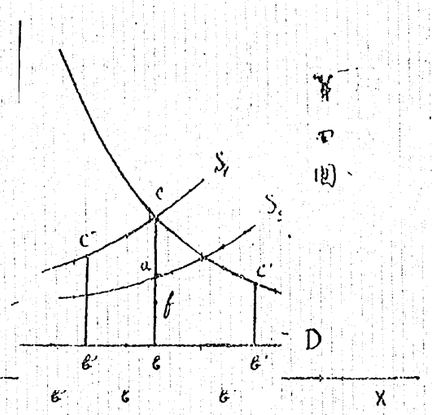
供給せられるナイフの量、OYを以て效用と貨幣とを無差別に計量し得るのであらうか。チャップマン氏は如何なる根據に基き、然らばチャップマン氏の第三圖は、需要曲線DD′に對して、座標軸OXは價格OYは購入せられる財貨の量。第四圖は限界效用の曲線P、c及びMに對して、OXは價格OYは效用或は滿足の單位。第五圖は企業の曲線P、Qに對して、OXは企業の生產物OYは價格。第六圖は收益の曲線RR′、QQ′及びPP′に對して、OXは「勞働及び資本の投下量」OYは小麥の收穫。（第七圖第八圖以下是に類す。）を表明する。然らばチャップマン氏は如何なる根據に基き、同じ座標軸OX、OYを以て、貨幣、財、效用、收穫等を無差別に計量し得るのであらうか。或る者は言ふであらう。經濟學は數學の一部門ではない。經濟學に於て用ゐられるダイアグラムは幾何學の作圖と同じものでない、其は唯說明の便宜に使用せられるのみと。或は Keynes 氏の如く言ふであらう。「第一、經濟學は數學的性質の諸概念を含む、其は數學的精神を以て分析せらるべきものである。第二、經濟學の或る部門あり、其部門に於ては記號法或は作圖法を實際に使用する事に依て有效なる助力が將來せられる。數學は、現在に到る迄の所、經濟的なる研究及び說明に於ける絕對に必須欠くべからざる道具てある事を立證しなかつた。然し乍ら數學的なるダイアグラムは幾何學の作圖と同じものでない、て發生する利益は、是を敢て揚言するも誇張に失するの慮はない」Keynes, Scope and Method, p. 267. 我々は進まねばならぬ。

(IV) 今需要曲線と供給曲線とは相交はるものと前提する。此場合若しも需要曲線と供給曲線とが密でなかつたならば換言すれば連續して居なかつたならば、S_1、S_2、Dの曲線は互に其の間隙に引かれたかも知れぬ。其場合交點は生ぜぬ　從て價格の點はない。經濟學者は需要曲線と供給曲線とが其に密なる事を證明せねはならぬ。證明は仲々困難である。

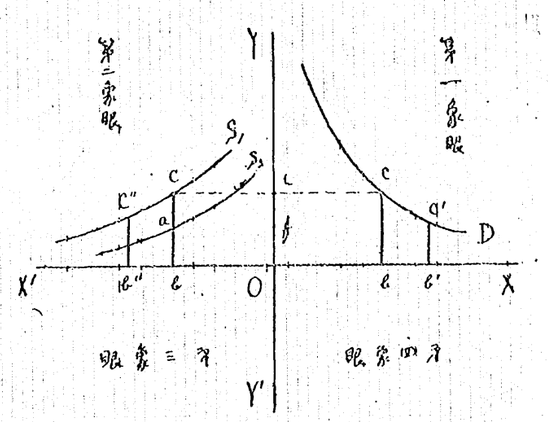
(V) Dの及びSの曲線は夫々需要及び供給の曲線である、然らばD或はS上の點は凡て需要或は供給の點である、然らば第三圖に於けるD、Sの交點cは需要及び供給の點である。交點は其儘では決して價格の點でない。cの縱座標cbが求められた時、始めて、交點cは此caの一點たる限りに於て價格の點となる。價格は需要曲線と供給曲線との交點にあるのではない。價格は其交點の縱座標である。

(VI) 今第三圖に於けるD曲線上、c以外の任意の點c′を取り、c′よりOXへ下せる垂線がOXと交はる點をb′とすれば

c′の座標（財貨のOb′、價格のc′b′）
S₁曲線上、c以外の任意の點c″を取りc″よりOX下せる垂線がOXと交はる點をb″とすれば
c″の座標（財貨のOb″、價格のc″b″）



S₁は供給曲線なる故、c″の量を提供せられる財の量を以て說明する
は無意義である。何者ばS₁は既に其を含んで居るからである。供給
に對するものは需要である。c″の横座標は財の量でなくて、財に對す
る欲望を計量せねばならぬ。欲望の計量は負の直線に依て爲される
故c″の横座標Ob″は第二象眼になければならぬ。價格は需要と供給と
に共通にOYに沿ふて計られるとすれば、第四圖の需要曲線と供給曲
線とは、夫々、第一象眼及び第二象眼に表現せらる可きであらう。
第五圖參照
今ナイフの需要と供給とには變化なく、貨幣價値の側に變化あり、
價格がcbからfb（或はfO）へ下つたとする。此場合fは需要曲線、供
給曲線の何れの上にもない。從てD、S₁の交點にない。此事は第四圖に於ては不合理に見ゆるが第
五圖に於ては何等の不都合も起さない。更にナイフの需要が變化して、cが例へばc′に變化するな
らば、其に從て供給も變化する。然るに凡ての變化する供給の點はS₁の上に豫定せられて居る。今
變化した供給の點を例へばc″とすれば、價格（正しくは價格の點）は需要と供給との交點にない、



第五圖

此事は第四圖に於ては不合理に見ゆるが、第五圖に於ては何等の不都合も起らない。

(VII) D及びSは其のある可き象眼を異にする、從て決して相交はる事はない。D及びS曲線上の凡ての點は價格のOY線上に投影せられる。我々は言ふ。需要曲線と供給曲線とは決して相交はる事はない。價格は點でない。而して價格の點は需要曲線と供給曲線との交點にはない。

(VIII) 需要曲線上の任意の一點c′、供給曲線の上の任意の一點c″の座標を求めると言ふ事は、需要、供給の世界の一事實をば夫々の世界の限界を劃する（供給の世界、と、價格の世界）、また（需要の世界、と、價格の世界）へ投影してみる事である。

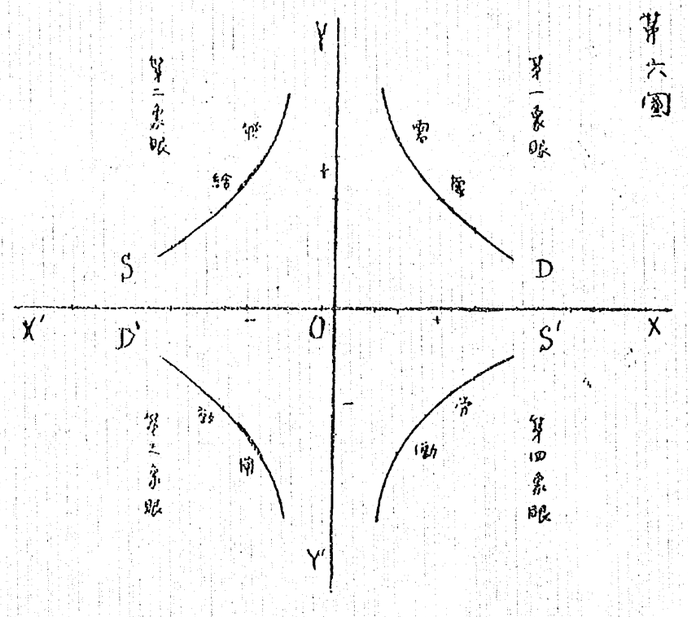
斯くて我々は
c′の座標を（Ob′の供給、c′b′の價格）
c″の座標を（Ob″の需要、c″b″の價格）
に求めるのである。

(IX) 需要曲線は第一象眼に、供給曲線は第二象眼に表はせ。然らばOYは兩者に共通に價格を表はし、OXは提供せられる財の量、OX′は提供せられた財に對する需要を計る。

(X)第一象眼と第三象眼、第二象眼と第四象眼とは夫々對稱である。從て第六圖のD曲線、S曲線は、D′曲線、S′曲線に移されるであらう、D及びSは、經濟學の世界其者を基として考へられた場合の需要曲線と供給曲線とであるが、D′とS′とは、人間的價値的認識の世界の一部としての經濟學の世界の、需要曲線と供給曲線とである。其意味は、DとSとが自然的非價値的認識の事實であるに對して、D′とS′とは人間的價値的認識の事實であると言ふ事である。D、Sの曲線に就ては、價格は正、供給も正、需要は負であるが、D′、S′曲線の場合、價格は負、供給も負需要は正である。何者ばD′、S′は人間的價値的認識の事實なるの故を以て一般に負に着色せられるからである、正の負は負、負の負は正であるからである。人間的價値的認識の世界を經濟學の世界に見出すならば、其は經濟價値說の世界である。然らば第三象眼のD′は需要曲線でなくて效用價値の曲線である、第四象眼のS′は供給曲線でなくて勞働價値の曲線である。OXは效用、OYは同じく價格を計量する。效用曲線、勞働曲線上の任意の點は凡て、價格の直線OY′の上に投影せられる。我々は次の如く言ふ。

第一及び第二象眼は需要と供給と價格の自然的實證的の世界。第三及び第四象眼は效用と勞働と價格との價値的觀念的世界。を表現する。價格は凡ての場合に共通する要素である。

需要供給價格論と效用勞働價格論（或は效用勞働及交換價値論）との本質的關係は第六圖に依て正確に、幾何學的に表明し得るであらう。經濟學の諸問題が價格を中心とする事も正確に理解せられ得よう。



(XI)第七第八第九の各圖に於ける曲線を夫々、價格の曲線P、效用の曲線U、勞働の曲線Lとすれば、YOL圈内にある三ッの世界は夫々、價格の世界、效用の世界、勞働の世界である。

價格は勞働と效用とを因數とする。價格は需要と供給とに依て定まる。

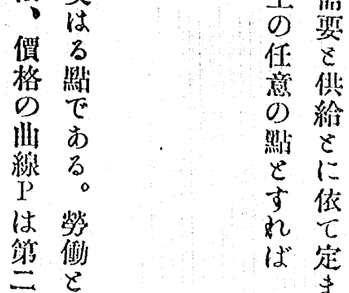
今OXを勞働の軸、OYを效用の軸、P₁をP曲線上の任意の點とすれば

P₁の座標（Oaの勞働、Obの效用）

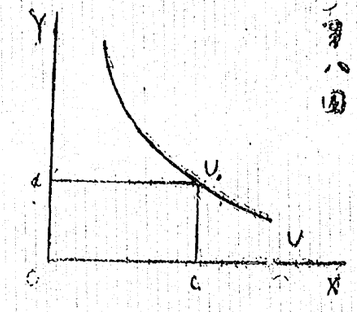
OXを供給の軸、OYを需要の軸とすれば

P₁（Oa供給、Ob需要）

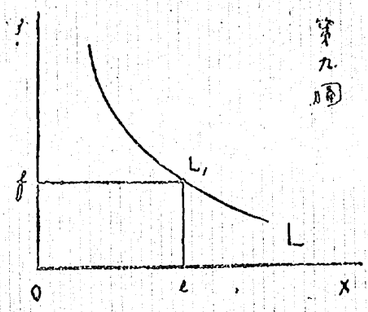
但しa、bはP₁よりの垂線が夫々、OX、OYと交はる點である。勞働と供給とは共に正、效用と需要とは共に負とすれば、價格の曲線Pは第二象眼若しくは第四象眼に屬するものであらう。



第八圖



第九圖



效用は欲望と欲望の對象とを因數とする。

U_1（Oc對象、Od欲望）

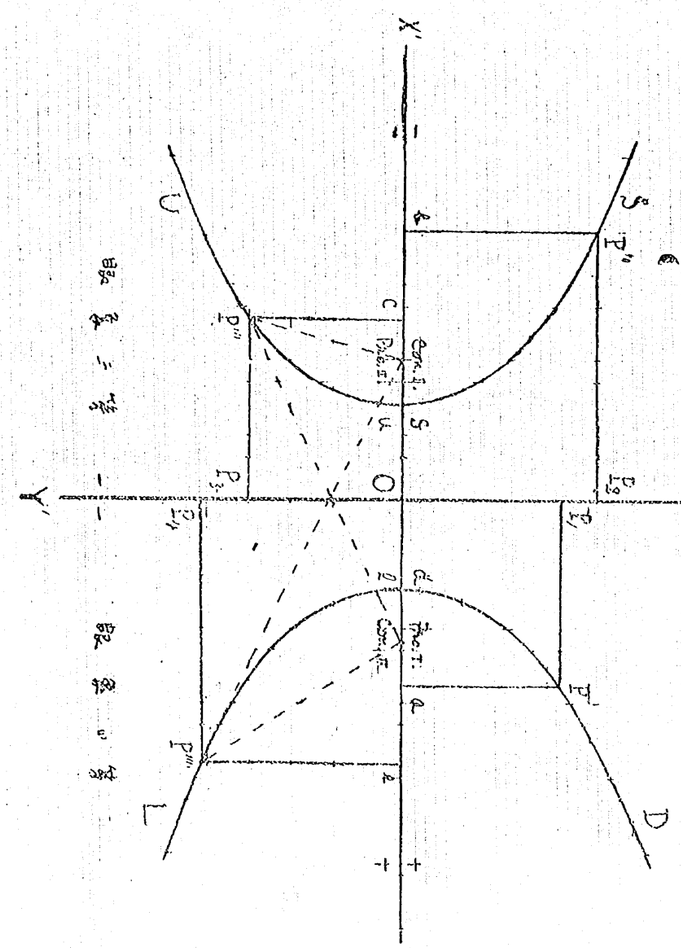
UはOc、Odの、正、負の性質如何に依て、第一第二第三及び第四象限に屬す。

勞働は自然的要素（土地或は人口）と人間的要素（資本或は企業）とを因數とする。L_1（Oe自然的要素、Of人的要素）L_1はOe、Ofの、正、負の性質如何に依て、第一、第二、第三、第四、象限に屬す。

需要曲線、供給曲線も同樣にして考へられる。第七圖は座標軸に價格を含まず、第八、第九圖は價格を含ざるに注意す可きである。

(XII) (1)價格は需要と供給とに依て定まる。經濟的なる需要は一般的需要が或る點迄增大して經濟的利益の發生を可能ならしむる時始めて存在する。供給の場合も此と同じく、供給する事に依て經濟的利益を發生せしめ得る時にのみ發生する。從て需要曲線と供給曲線とは座標軸の原點に於て交はる事はない。常に利潤を（一般的には經濟的利益を）挾んで相對峙する。利潤は一般に價格の增大と共に增大する。

(2)價格は勞働と效用とに依て定まる。此場合は(1)と相似である。



(3)價格は需要と供給とに依て定まる、或は價格は勞働と效用とに依て定まる。價格は一般に $xy=P$ 此は双曲線の方程式である。

(4)經濟學の認識の對象一般は價格一般であり、凡ての認識の對象は價格に投影せられる。

(5)第一、第二象限は自然的非價値的認識の世界、第三、第四象限は人間的價値的認識の世界、前者に於てOYの價格、OXの供給は正、OX′の需要は負。後者の場合OY′の價格、OXの效用は正、OX′の勞働は負。價格はYOY′。

(6)需要と效用、供給と勞働とは對稱。第一第二象限一般と第三第四象限一般とも對稱。

(7)需要と效用の曲線、供給と勞働の曲線は夫々消費者文化價値及び生産者文化價値に關す。

以上七個の條件を具備するダイアグラムを作れば右の如くてあらう。

但し圖中Dd、Ss、Uu、Llは夫々需要曲線、供給曲線、效用の線及び勞働の線を表明する。二個の點Pro. と Con. とは夫々生産者文化價値、消費者文化價値の點である。双曲線DL、SUの二ッの焦點である。(Pro. I) と (Pro. II)、(Con. I) と (Con. II) とは夫々對稱且つOは原點てある。YY′は價格、OXは第一象限に於ては財の量、第四象限に於ては效用。OX′は第二象限に於ては需要。第三象限に於ては勞働を計る。

OY上任意の一點P_1を取れ、然らばP_1Oは一定の價格である、一定の價格は我々が日常現實の取引に於て直接且つ確實に經驗し得るものである。P_1を通りOXに平行なる直線がDdと交はる點をP′とせよ、然らば需要曲線Ddの上に寫された價格の姿は曲線分P′dであらう。逆にP′dの需要が存する時の價格はP_1O。價格P_1O、需要P′dなる場合に提供せられる財貨の量はP_1P'。即ちOaてある。

P′の座標（價格のP_1O、財のOa）……(A)

OY′上任意の一點をP_3とせよ、P_3を通りOX′に平行なる直線がUuと交はる點をP'''、$P_3O//P'''c$とすれば、價格P_3Oなる場合、認められたる效用は曲線分P'''_u、費された勞働はP_3P'''即ちOcである。

P'''の座標（價格のP_3O、勞働のOc）……(C)

同樣にして第二象限にP_2、P''及びbを作れば

P''の座標（價格のP_2O、需要のOb）……(B)

價格P_2Oなる場合、供給は曲線分$P''s$、需要はObてある。

P''''の座標（價格のP_4O、效用のOe）……(D)

價格P_4Oなる場合、費された勞働は曲線分$P''''l$、認められた效用はOeてある。

(XIII) 任意の富に對してP圓の價格が成立したとする。消費者が是に對して認めた效用をx、消費者餘剰をaとすれば

$$(x-P)=a \quad \cdots\cdots(1)$$

其の同じ富に對して費された勞働をy、其の富の交換によつて發生する經濟的利益をa′とすれば

$$(y+a')=P \quad \cdots\cdots(2)$$

(1)より　x−a=P ……

(2)と(3)とより

y+a′=x−a　∴　x−y=a+a′ ……（4）

(4)を一定時一定點に於ける經濟的利益の總體とし且つ(4)の兩邊を資本全額で除して

$$\frac{x-y}{\text{資本全額}}=\frac{a+a'}{\text{資本全額}}$$

$$\therefore \frac{x}{\text{資本全額}}-\frac{y}{\text{資本全額}}=\frac{a+a'}{\text{資本全額}}=\text{平均利潤率}$$

平均利潤率は一定時一定點に於て一定である。從て、一般的に

(Con. I). P′′′′ − (Pro. I). P′′′′ =a+a′（一定）

從てLiとUiとは双曲線である。二定點、生産者文化價値の點と消費者文化價値の點、への距離の差が一定なる點の軌跡である。(XII)の(3)參照。

富とは價格を有するものの事であり、富の現象は凡て双曲線に表はされ、双曲線は凡てYY′軸即ち價格へ投影せられる。經濟現象は凡て價格に換算せられる。

XX′とYY′との交點はOrigin 原點である。其は價格にも、需要にも供給にも、效用にも勞働にも、其他凡ての經濟現象に共通する點である。其は經濟學の認識主觀の點に外ならぬ。價値的に言へば經濟的文化價値である。價格に直せば○圓○錢の價格である。○圓○錢を敢て貨幣と呼ぶならば其は貨幣に外ならぬ。

生産者文化價値の點と消費者文化價値の點とは、双曲線の焦點である。生産と消費とが經濟行爲である限りa+a′は常に存在する。一ツの價値、の點への距離の差は、一定時一定點に於て、常に一定である。

斯くて貨幣、價格、需要供給、效用勞働其他百般の經濟現象は幾何學的に正確に表現し得る。マルクスの價値說。等しき價値の交換、直角の假設、ユークリッド的な考へ方。マルクスの價格說、價値以上に或は以下に賣られる。鈍角或は銳角の假說。非ユークリッド的考へ方。ユークリッドを非ユークリッドの一ツの特別の場合と考へるならば、マルクスの價値說と價値說とは幾何學的に矛盾なく說明し得られる。正確に說明し得られる。